井本氏　小説『輝ける闇の異端児　アルチュール・ランボー』を刊行

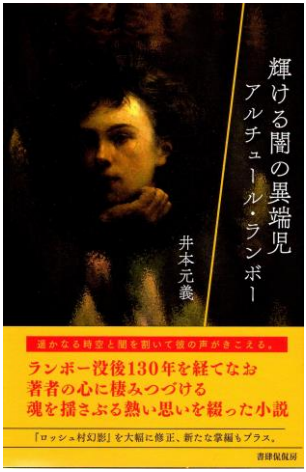
同人井本氏が、九冊目の作品集『輝ける闇の異端児　アルチュール・ランボー』を刊行されました。刊行日は二〇二二年一月。『ロッシュ村幻影』を大幅に修正、新たな掌編をプラスと銘打ってあります。

帯文に「遥かなる時空と闇を割いて彼の声が聞こえる。ランボー没後一三〇年を経てなお著者の心に棲みつづける魂を揺さぶる熱い思いを綴った小説」とあるように、井本氏の人生の意義の全てを考えることと同義語である、といっても過言ではないアルチュール・ランボー、その人。

そのランボーのゆかりの地を自ら訪ね、「ランボーの生い立ち、家族（特に、妹ヴィタリーの死、イザベルの献身的な愛）、退屈なシャルルビルでの生活と狂乱のパリでの生活の中で踊り狂うように迸り出た詩、パリ詩壇での喝采のとき、ヴェルレーヌとの諍い、詩を捨て彷徨った挙句のアフリカでの商人としての生活、体調を崩し片足切断、ロッシュ村への帰還、激しい痛みと錯乱の幻覚にさいなまれ、教会に反抗し神を愚弄し憎悪しながらの死」という軌跡を、井本氏の鋭い感覚が辿りゆきます。

井本氏の発する言葉は、ランボーの死の場面で、「己の身体でありながら思うように動かせないもどかしさ、そして痛みあるいは喪失。（中略）何故にこの苦痛に満ちた己は存在させられたのか。もし神が己を存在させたのなら、この怒りと憎悪は神に向けられるものだ。（中略）人間はそれほど強くない。ならば耐えがたい苦悩のうちに煩悶し、神を呪ったものだけが救われる。すなわち神の存在を信じるからである。」と、反語のまた反語として私たちの胸を射ます。

さらに、帯文の裏面には、次のように記されます。

「闇に蹲る彼の沈黙ほど美しい詩はない、と僕は結論付けた。ハラルでの十一年間の闇、そこから発せられた詩ではなく日常の些事を綴った手紙こそ、文学の最高峰の一つだと考えるに至り、そこに僕自身の人生の意義を重ねた。僕は最後にと、彼のゆかりの家、都市、カフェ、ホテルなど順を追って回った。最後にマルセイユの丘に登った。地中海に沈む太陽。激しく墜落していく太陽。アルチュール・ランボーはそれを永遠だと詠った。一切のものは無であり、永遠であるだけだと。（あとがきより）」

（有森　記）